

2020/07/26

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑧

『神の怒り』ヨハネ 3:22-36

■ バプテスマのヨハネとキリスト

「その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が多かったからである。人々は次々にやって来て、バプテスマを受けていた。——ヨハネは、まだ投獄されていなかったからである——それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論議した。彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。見てください。ヨルダンの向こう岸であなたといっしょにいて、あなたが証言なさったあの方が、バプテスマを授けておられます。そして、みなあの方のほうへ行きます。」ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。」(ヨハネ 3:22-27)

当時は、ヨハネとその弟子たち、イエス様とその弟子たちが、それぞれバプテスマを授けていました。バプテスマは、神を第一に生きていくことを公に宣言するもので、結婚式のようなものです。ひそかに神を信じ愛するのではなく、人々に宣言し、クリスチャンとして見られるようになることは大切なことであり、自分自身の救いの確信にも役立ちます。ですから、イエス様を信じるようになったら、速やかにバプテスマを受けることが望ましいのです。

ヨハネの福音書のテーマは「永遠のいのち」です。私たちがこの地上で受けるすべてのものは幻で、消えてなくなります。神から受け取る神のいのちだけが、永遠に残る真実なものです。

「あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前に遣わされた者である』と私が言ったことの証人です。花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」
(ヨハネ 3:28-30)

ヨハネは、自分とイエス様を花嫁と花婿にたとえました。これは、私たちと神様との関係を表しています。この当時、夫婦は一つです。夫のものは妻のものであり、妻のものは夫のものであります。つまり、神と夫婦であるとは、私たちは神のものを所有しており、神様は私たちのものを所有しているということです。私たちが持っているものは、負債です。そして、神が持っているのは永遠のいのちです。神は私たちの負債である罪を背負ってくださったのです。それが十字架です。

■ 神の国を理解する方法

「上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。」

(ヨハネ 3:31-32)

私たちは地上のものですから地上の言葉を語り、天からの証しを理解することができません。それは、理性では神を理解することができないということです。

人には理性があり、真理を追求したいという願いがあります。しかし、因果律によって宇宙の始まりまで探ったところで人は行き詰まってしまいました。人間は時間と空間の中でしか物を見ることができません。ビッグバンによって宇宙は始まり、それは今も拡大していて空間には端があることがわかって、空間や時間の外の世界は、人間には理解できないのです。

わからないことを想像することを、カントは「理性の暴走」と呼びました。彼は、人の理性には限界があるのだから理性を取り締まる警察が必要だと言いました。そして、無法地帯になった哲学を一つにまとめ、宗教と分離したのです。カントとちょうど同じ頃、科学者たちもまた想像によっていろいろな説を作り、理性の暴走がありました。ニュートンが近代科学の一つにまとめ、宗教は科学とも分離されました。

カントは信仰の場所を確保しようとしたのです。当時、信仰とは、理性で神を追求し、理性で神を証明することだと思われていました。しかし、理性はこの世界のことしかわかりません。このように理性には限界があることを認めない限り、ただつまらない議論を繰り返すことになります。神の国は、時間と空間の外の話です。それは、信じなければならないものなのです。

「そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。」

(ヨハネ 3:33-34)

「確認の印」とは、たとえ理解できなくても、受け入れて信じるという信仰のことです。これが、人が神の国を知ることができるたった一つの方法です。

理性には限界があり、神が行っていることを理解できません。ですから、理性を優先すると「自分には理解できないから信じられない」となってしまいます。イエス様のもとに集まった弟子たちの多くが、イエス様のことばにつまずいて去っていきました。彼らは、理性と信仰を混同させ、神のことばを信じようとしませんでした。

神を信頼しようとするなら、自分が理解できるかどうかという基準は捨てなければなりません。「聖書がそう教えているなら信じます」という信仰が必要なのです。

多くの人が、イエスは神であること、処女から生まれたこと、復活したことなどが信じられないと言ってつまずきます。しかし、理性ではわからなくても、神のことばに対して確認の印を押すことはできます。それは、理性よりも信仰を優先させることです。自分の理性には限界があることを認め、信仰を優先させて確認の印を押す生き方ができれば幸いです。

■ 「神の怒り」とは

「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見る
ことがなく、神の怒りがその上にとどまる。」(ヨハネ 3:36)

「御子に従わない者の上には神の怒りがとどまる」と聞くと、多くの人が「地獄に落ちる」あるいは「罰を受ける」というイメージを抱きます。しかし、これは「神の怒り」を正しく理解していないことから生まれる誤解です。聖書を理解するには、文脈から理解することが大切です。

まず、この箇所を正確に訳すと、「御子を信じている者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者は、むしろ、神の怒りがとどまり続けている。」となります。いったいどういう意味なのでしょう。

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。」(ヨハネ 3:17-18)

「神が来たのはさばくためではなく救うためである」とあります。「さばく」とは「分ける」という意味です。神の目から見て、すでに死んだ状態である私たちは、最初からさばかれた状態にあります。死んでいる者をさばく必要はありません。そうではなく、神は、死んだ状態にある私たちを生かすために来られたのです。これが「救い」です。

つまり、「御子に聞き従わない者は、むしろ、神の怒りがとどまり続けている。」とは、御子に聞き従わない者をなんとしても救いたいという表現なのです。神の怒りは、私たちが考えるような罰やさばきではありません。ですから、「とどまり続ける」と現在形で書いてあるのです。イエス様は次のように言われました。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。」

(ヨハネ 16:8-11)

イエス様は、「人は神のさばきについて誤解している」と言っておられます。「神のさばき」とは、悪魔がさばかれるということであって、人を対象としたものではありません。つまり、「神の怒り」とは、人を救うために罪に対して向けられる表現なのです。御子を信じない人に神の怒りがとどまり続けて、その罪を攻撃し続けることで、その人をなんとしても救いたいという神の愛です。このことを誤解してしまうと、神との関りが表面的で形式的なものになってしまいます。神に怒られないように律法にしばられ、自分の良い行いをアピールし、神に対しては、ただほめたたえるだけで近づこうとしなくなるのです。

■人に対する神の怒りとは——「ナーハム」は何を表しているか

神の怒りを表すのに使われている「ナーハム」（ヘブライ語）は、もともとアラビア語から派生したことばで、走ってきた馬が息を整えようとする様子から来ています。そこから転じて、息が切れるような取り乱した状態を、何かで安堵しようとする様子を表す言葉が「ナーハム」です。失敗して心が乱れた時は悔やむことで心を収めようとするところから「悔やむ」と訳され、意地悪されて心が乱れた時に収める場合には「復讐する」「恨みを晴らす」「怒る」と訳され、家族が苦しんでいる時に自分の心を収めるような場合には「憐れむ」と訳されます。

聖書全体で「神のナーハム」の訳は、「憐れむ」、「怒る」、「悔やむ」と実に様々です。これは翻訳者の解釈によるものなのです。

神の心が乱れるのは、愛する者が苦しんでいる時です。ですから、「怒る」「悔やむ」と訳されている場合であっても、その根本にあるのは「憐れみ」の思いです。つまり、「神の怒り」は、「罪に対する怒り」であり「人への憐れみ」を表しています。ですから、「神の怒りがとどまり続けている」（ヨハネ 3:36）とは、「神の憐れみがとどまり続けている。」と解釈すべきです。

「それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」（創世記 6:6）

この「悔やむ」も「ナーハム」です。神は本当に人を造ったことを後悔したのでしょうか。むしろ、人を憐れんで心を痛められたのではないのでしょうか。神の思いを人の思いに引き下げて理解しようとしてはなりません。

■怒りは誰のものか

「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」（ローマ 5:9）

多くの人が、キリストが私たちの罪を背負って十字架にかかったのは、神の怒りから救わ

れるために父なる神に赦しを請うためだと誤解しています。しかし、それでは、父なる神とイエス・キリストの考え方が異なることになってしまい、三位一体の神が崩壊してしまいます。イエス・キリストの十字架は、神の愛を明らかにするものです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

(ローマ 5:8)

実は、「神の怒りから救われる」(ローマ 5:9) と訳された原文は、ただ「怒りから救われる」です。なぜ翻訳者は「神の怒り」だと思ったのでしょうか。それは「罪に対して罰がある」という思い込みがあるからです。その結果、新改訳聖書では、単に「怒り」となっているとところが16か所も「神の怒り」あるいは「御怒り」と翻訳されています。原文で明確に「神の怒り」と書かれているのは4か所だけです。

罪に対して罰があるのだと考えると、「怒り」は神のものであるという解釈になってしまいますが、何度も申し上げているように、神にとって罪は病気と同じようにいやす対象であってさばく対象ではありません。聖書の中で「救い」と「いやし」は同じ言葉が使われており、イエス・キリストの十字架はいやすためだと、はっきり教えられています。

神の怒りと罰に対する理解は、神様と私たちとの関わり方に大きな影響を与えるものなので、極めて重要です。神の罰があると考え人は、罰を恐れて、良い姿だけを見せようとうわべの関りになり、神に近づこうとはしなくなります。そして、ただ神をほめたたえるだけの関りをして、賛美を使って程よい距離を保ち続けるのです。

しかし、神に治療してもらおうと思う人は、自分の弱さや罪の苦しみを神に訴えます。いやされることを知っているからです。

このように、罰を恐れるのと治療してもらおうのとでは、まったく違う生き方になります。あなたは神とどのような交わり方をしているのでしょうか。

「怒り」は、私たちの信仰に大きな影響を与える重要なキーワードですから、「神の怒り」と訳されているのは残念なことです。本当はどのように訳されるべきなのでしょうか。

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」(ローマ 1:18)

この「神の怒り」は正確に訳されています。「罪に対して神の怒りが啓示されている」とは、「罪に対して神のいやしが啓示されている」ということです。もし、ローマ 5:9 を「神の怒り」ととらえると、「罪のいやしから救われる」ということになり、意味が通じません。

さらに、ローマ人への手紙は次のように語ります。

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」

(ローマ 4:15)

律法によって招かれる怒りとは、罪のことです。

「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。」（ローマ 5:13）

罪は律法によって明らかにされます。私たちの悪い行いは、すべて怒りから発していることを考えると、「怒り」は「罪」を表すものと解釈することができます。

■「神の怒りからの救い」の本当の意味

さらに聖書を深く読むと、パウロが「律法」という言葉を使うときには、二つの意味があることがわかります。

「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」（ローマ 7:25）

ここに「罪の律法」と「神の律法」という二つの律法が出てきます。律法とは行いの規定です。罪の律法は、神が見えない不安のため、人からの愛や評価を得る手段として生まれました。定められた規定（律法）を守ること、その人の立派さや愛される価値をはかって、人の価値を判断するために使われるものです。それに対して、神の律法は、私たちに罪に気づかせて、神の前にへりくだって、神に助けを請うために与えられたものです。しかし、人は、神の律法すら自分が神や人に愛されるための基準に使って、罪の律法として用いるようになったのです。

私たちが怒りを覚えるのは、ルールに違反している人を見たときです。つまり、律法が怒りを招くのです。罪の律法を生み出した「愛されたい」という願望は、死から来ています。この律法を終わらせるためにキリストは来られました。「死のとげは罪であり、罪の力は律法である」（I コリント 15:56）とあるとおり、怒りを覚えたり、腹を立てたりする思いは、すべて律法から生まれます。つまり、律法から救われるとは、罪の律法から救われるという意味なのです。

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」
（ローマ 10:4）

キリストが終わらせた律法とは、罪の律法です。パウロは、「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ 7:24）と訴えています。しかし、「死のからだ」「罪」「律法」「怒り」、すべて同義の言葉です。つまり、罪の律法を終わらせ、死のからだから救い出すとは、罪の罰から救い出すという意味ではなく、私たちが罪（怒り）から救い出すと理解することができるのです。

「神は愛する者をむち打つ」と確かに聖書に書いてありますが、それは平安な義の実を結ばせるための治療です。神は私たちを愛してやみません。そのために本気で臨まれるのです。その本気を表すために最適なことばが「ナーハム」だということです。

「ナーハム」は、怒りと同時に憐れむという意味が含まれています。本気で私たちを憐れみ、助けたいと願っておられることを伝えるため言葉が「ナーハム」であり、単なる「怒り」を表す言葉ではないのです。

このことがわかると、神との関り方がわかります。罰が与えられないためにどうすればいいかという前提で交わろうとすると、立派な行いをして、ほめてもらおうとするようになります。しかし、神がどれほど本気で私たちを憐れもうとしておられるかを知る人は、本気で自分の苦しみを訴え、罪を言い表し、助けを請うようになれるのです。これが、神が私たちに求める信仰（ピスティス）です。